調査報告

大正 8（1919）年の学習院北満旅行をめぐって

武藤那賀子

はじめに

明治 38（1905）年の日露戦争の勝利後，日本軍が満州に駐留し，翌明治 39 年には文部省と陸軍が「満韓旅行」を企画する。学習院生は教員に連れられたこの旅行で初めて満州を訪れ，この時の様子を，明治 40（1907）年刊行の『輔仁会雑誌』「満韓旅行記念号」に掲載した。1 か月近くにわたって行なわれたこの視察旅行では，当時は高価であった汽車での長距離移動をし，戦地跡や日本が侵攻し始めた土地を回った。

戦前の修学旅行を含む海外旅行は，旅行実施後に旅行記を書くことが多かった。試みに，『輔仁会雑誌』に掲載されている旅行記を一覧にすると，以下のようになる（**表 1**）。

表 1　『輔仁会雑誌』の旅行記一覧

号数	刊行年月日	題名
71 号「満韓旅行記念号」	明治 40（1907）年 3 月	
73 号	明治 40（1907）年 12 月	樺太紀行
82 号	明治 43（1910）年 11 月 27 日	北京旅行
83 号	明治 44（1911）年 3 月 15 日	北京旅行
103 号	大正 6（1917）年 11 月 28 日	樺太旅行
106 号	大正 7（1918）年 12 月 20 日	北支那・満州・朝鮮
118 号	大正 11（1922）年 12 月 17 日	山東北支那旅行
121 号	大正 13（1924）年 7 月 10 日	台湾の馘首 日月潭の一日
122 号	大正 13（1924）年 12 月 30 日	樺太，北海道旅行
131 号	昭和 2（1927）年 12 月 26 日	金剛山探勝記
137 号	昭和 4（1929）年 11 月	満鮮旅行日記
146 号「満州特輯号」	昭和 7（1932）年 12 月 25 日	
154 号	昭和 10（1935）年 12 月 15 日	満鮮紀行
164 号	昭和 14（1939）年 11 月 30 日	鮮満旅行記
166 号	昭和 15（1940）年 11 月 20 日	中支の旅

学習院の海外修学旅行は，大正 7（1918）年に始まった。つまり，それ以前は個別に海外に行くことしかなく，その際の見聞録を『輔仁会雑誌』に載せていたにすぎない。大正 7（1918）年以降，海外修学旅行に行った学生たちは，『輔仁会雑誌』に現地での様子を記すことが多かった。このため，現在の私たちにも，当時の修学旅行の様子が事細かに伝わる。しかし，翌大正 8（1919）年の旅行は，こうした見聞録が一切見当たらない。大正 8 年の「庶務課日記」[1]によれば，修学旅行の途中で帰国したことになっている。彼らは，なぜ帰国したのだろうか。

本稿では，学習院内部の記録と新聞記事，そして公文書から分析することで，大正 8 年の学習院の北満旅行の詳細を明らかにするものである。不明確なことの多い当該修学旅行の詳細を明らかにすることで，学習院旅行を取り巻く状況の実態に近づけるものと考えている。

1.『西受大日記』と学習院の『庶務課日記』

『西受大日記』[2]を見てみると，大正 8（1919）年 7 月 8 日に提出された「学習院学生西伯利満洲方面旅行ニ付便宜供与ノ件」[3]には，学習院長北条時敬から陸軍大臣田中義一への文書がある。そこには，学生約 10 名が大谷勝眞[4]と安楽直治[5]の 2 教官の引率で，大正 8 年 7 月 24 日に敦賀を出発し，ハバロフスクに向かうシベリア・満洲の修学旅行に行くための便宜供与の依頼があり，日程表も付されている。また，参加学生 10 名の名前――楢原良一郎[6]，田中薫[7]，三井高篤[8]，石渡忠四郎，野崎貞信，高辻正長，岡澤精武，小笠原長隆，一条實基[9]，仙石久博[10]――も文書の最後に示されていることから，この旅行は教官 2 名と学生 10 名で行ったことがわかる。日程表には，「敦賀発　七月二十四日発」とあり，この日を 1 日目として全 24 日間の行程が書かれている。この日程表を次に掲げる（**表 2**）。

日程表とともに提出された書類には「学習院学生約十名同院教官大谷勝真同安楽直治／附添七月二十四日東京（敦賀）出発西伯利満洲方面へ修学旅行候ニ付敦賀浦潮間陸軍交通船便乗願出許可／相〔求〕候間可然便宜ヲ与ラレ〔度〕也」[12]とあり，7 月 24 日に東京を出発したのか敦賀を出発したのかは不明である。また，7 月 24 日から 24 日間かけて行なわれる修学旅行の帰着日は 8 月 16 日になるはずであるが，帰着予定日は 8 月 10 日になっている。このため，この日程表はあまり正確なものではないといえ，また，実際の日程がどうなったかも定かではない。

ここで，同年の「庶務課日記」を見てみたい。

表２　大正８（1919）年の北満旅行日程表[11]

	東京	発	七月十六日頃	東京出発トス	宿所								
1	敦賀	発	七月二十四日発		船中								
2	船中				船中								
3	浦塩斯徳	着		市街、官衛、司令部	浦塩	宿泊							
4	浦塩斯徳		滞在	博物館、東洋学院等見学	浦塩	宿泊							
5	浦塩斯徳		滞在	滞在見学の都合により、此の日ニコリスクに赴く	浦塩	宿泊							
6	ニコリスク			官衛博物館、軍隊等見学	ニコリスク	宿泊							
7	ニコリスク	発	午前八時頃 午後七時頃		車中								
8	ハバロフスク	着	午後三時半頃 午後六時頃	市街アムール河、タウスリ河 アムールスキノ公園博物館 軍隊等見学視察	ハバロフスク								
9	ハバロフスク		滞在		ハバロフスク								
10	ハバロフスク	発	午後一時五十分		車中								
11	ニコリスク	着 発	午後二時五十分 午後四時二十分		車中								
12	哈爾賓	着	午後二時四十分頃		哈爾賓	宿泊							
13	哈爾賓		滞在	市街附近古蹟見学	哈爾賓	宿泊							

	哈爾賓	発	午前七時 午後七時〇五分	長春伊通河等見学 吉林方面見学	長春	宿泊							
14	長春	着											
15	長春		滞在										
16	長春 鉄嶺 奉天	発 着 発 着	午前七時 午後二時五分 午後六時四十五分 午後八時三十分	鉄嶺城、龍首山円通寺 蟒蜂潢古蹟戦蹟等見学	奉天宿泊								
17													
18	奉天 奉天	発	滞在見学 午後十時	新市街奉天城戦蹟 宮殿大政殿清寧宮 文溯閣東陵北陵黄寺	奉天宿泊								
19	安東 新義州 平壌	着 発 着	午前六時二十分 午前八時二十二分 午後一時二十六分	税関の検査を受く 平壌古蹟戦蹟見学	平壌	宿泊							
20	平壌 開城 京城	発 発 着	■■■時■■分 午後五時四十四分 午後七時二十五分	■■■■日都 の遺蹟及朝鮮市街 見学	平壌	宿泊							
21	京城		滞在見学	市街　宮殿　李王家 博物館等	京城	宿泊							
22	京城	発	滞在 午後七時五十分	京城附近見学	京城	宿泊							
23	釜山 下関	着 発	午前五時四十分 午後五時四十分 午後七時十分		船中								
24	東京		帰着	八月十日予定									

七月八日　火　晴

一　学生約十名西比利亜満鮮旅行ニ付／諸方面各所へ依頼状発送セリ[13]

八月六日　水　晴

一　シヘリヤ旅行　安楽大谷両教師ヨリ／シヘリヤ汽車発ノ見込ナキニ付帰京／ノ電報来テ院長御覧ノ教務課ニ於テ／夫々報知ノ手続ヲナス〔筈〕ナリ（浅野書記承知）[14]

八月十一日　月　晴

一　西伯利旅行ノ一行途中／ヨリ引返シ一行無事帰着／解散シタル旨監督者ノ一人／大谷嘱託出頭シテ述ヘラレタリ[15]

7月8日に学生10名がシベリア満鮮旅行に行くための依頼状を提出したことは「庶務課日記」『西受大日記』で一致している。しかし，8月6日には，シベリア汽車の出発の可能性がないために引率者である安楽・大谷から引き返す旨の電報が来ている。そして，11日には学生たちは帰国し，大谷がその報告をしている。『西受大日記』にある当初の予定では，学習院の一行は，8月6日には長春に滞在していることになる[16]。しかし，『庶務課日記』のシベリア汽車が出発しないという事態を考えると，8月6日時点で，彼らはニコリスクかハバロフスクでとどまったまま，ハルビンに至っていない可能性が大きい。

では，この当時のハルビンの情勢はどのようなものだったのだろうか。

2. 大正８年８月のハルビン

前節の学習院の学生と行動は別であるが，ほぼ同時におこなわれた一高生30名のシベリア旅行に関する8月19日付けの記事「西伯利行一高生途中から帰る」によれば，ハルビンの鉄道従業員の罷業，吉林奉天軍の騒動，普茶店の虎疫が帰国の原因であると言う。

西伯利を旅行し哈爾濱にて一行中の十四名と別れ菅沼教授引率の下に満鮮経由帰校の途に就きし一高旅行部生徒三十名■十七日午後七時半入港の関釜連絡船にて下関に帰■十八日朝下関■帰東したるが菅沼教授の談に依れば浦潮では汽車の都合付かず漸く貨物車まで借りて哈爾濱に行つたが鉄道従業員の罷業と吉林奉天軍の騒動，普茶店の虎疫で前にも進めず寝る所もなく兵站の宿舎に落付いたが今度は貨車に積んだ荷物が盗難に會ふ憂ひがあるので交代の不寝番を二週間も続け悉く閉口し頑丈な十四名だけがイルクーックへ進み残餘は斯して引返して来たのだと。[17]

問題は，一高生たちがいつハルビンに着いたのかということであるが，交代の不寝番を２週間続け，８月17日に連絡船に乗っているとあるため，８月４日より前，つまり，学習院の学生より前にハルビンに到着していた可能性が高い。とするならば，やはり，学習院の修学旅行の帰国の理由も，一高と同じようなハルビンの鉄道従業員の罷業，吉林奉天軍の騒動，普茶店の虎疫の３つが考えられる。

では，ハルビンでのこの３つの背景はどのようなものだったのであろうか。

３．ハルビンの鉄道従業員の罷業と吉林奉天軍の騒動

そもそも，なぜこの時にハルビンの鉄道従業員は罷業したのだろうか。国立公文書館所蔵目加田家文書の「哈爾浜より「オムスク」まで　章勲夫」には，８月９日からの記事で「ハルビンでは給料の支払い通貨問題のため東清鉄道現業員は全線に渉り，同盟罷業し，一週一回の浦塩斯徳とオムス間の急行列車…(以下略)」[18]とある。さらに，８月12日の『時事新報』「政府の秕政」には，「而して物価の騰貴と欠乏とは著しく地方民をして反政府的ならしめる。過激派はこの間に処じて巧に扇動し反政府の気勢を高める。又近時瀕々として行わるる鉄道従築員の同盟罷業も政府の政策に大障害を与えねば已まない。彼等の同盟罷業も要するに生活難から生じたもので露貨の暴落と物価の騰貴とは安い給料では生活出来ないというのである。この間にも過激派の扇動は行われる。」[19]と，反政府感情が絡んでいることを示唆している。

だが，この少し前，７月１日から７月３日に『横浜貿易新報』に掲載された「日貨排斥魂胆（一～四)」には，「日貨ボイコット運動より全市罷業運動に至る」[20]とある。さらにこの少し前の６月12日の『東京朝日新聞』には，「支那排外気勢昂進／日本態度」には，「現在の排日状態に就て注意すべきは排日運動と非買同盟の成行如何の二点なり最近排日暴動は前後四回あり即ち辰丸事件，安奉自由行動，日支交渉の当時及び今回の運動是なり」[21]とあり，同日の同新聞「上海船夫罷業　事態甚だ重大」には，「排日運動の形成俄に悪化し船内人夫罷業の機運溢れ居れりとあり尚上海よりも形成日を経るに従ひ険悪にして各労働者全部に亙る大同盟現出の恐れあり」[22]とある。この他にも，とくに６月と７月に各地で罷業運動（ストライキ）が盛んにあったことがわかっている。これらの新聞記事から，罷業運動が排日運動にかかわっていることがわかる。それは，いうまでもなく，３月１日に朝鮮半島で始まった三一運動と５月４日に北京で始まった五四運動の影響があるだろう。三一運動と五四運動を皮切りに高まっていった反日感情は，罷業運動を引き起こし，それがシベリアにも飛び火して，修学旅行生たちの足をとどめたといえそうである。

4. 大正８（1919）年のコレラ流行

シベリア旅行に向かっていた一高生が引き返してきた理由の三つ目であるコレラは，この当時にどれほど流行っていたのであろうか。

日本では，「コレラは1822年以後，たびたび流行し，大きな被害を与えたが，十九世紀後半から展開された水道などの衛生インフラの整備や検疫制度の確立によって，しだいに流行は抑制されることになった」[23]。そして，「東南アジアの各地域に被害を与えたコレラは，一九一九年五月末に中国南部の仙頭，潮州に感染し，以後，中国沿岸地域，すなわち，香港，澳門，厦門，福州，上海，青島，大連，営口などに感染した。一九一九年八月初旬には，上海から無錫，常州などの内陸都市にも感染がひろがった。……こうした内陸都市への感染は，主として鉄道路線を経由したものであり，江蘇州では，上海から江蘇，無錫，鎮江，常州，揚州，江陰，蕪湖，南京（以上，京滬鉄道），松江，嘉興，杭州，呉興，粛山（滬寧鉄道）に感染し，東北では，営口に感染したコレラが，満鉄によって奉天へ，中東鉄道によって哈爾浜，ウラジオストックへも感染した」[24]。大正８（1919）年８月が特にひどい状況であったらしいことがわかる。さらに詳細をみると，『《明治百年史叢書》関東局施政三十年史』[25]には以下のようにある。

> コレラは年々上海及び南支方面より来航する船舶に依つて其の病菌を齎され，……更に大正八年夏南支沿海及び上海方面に流行した際は其の病菌が大連に輸入され，一時危険に瀕したが陸上の予防警戒により直に之を削減した。然しながら螢口満人街を襲うた病菌は接続（ママ）螢口附属地に侵入し，同時に京奉線によつて各地に伝播し遂に南北満州一帯に蔓延した。管内に於ても二千三百四十二人の患者と，二百三十一人の保菌者を出して漸く収束した。大正十一年には天津より螢口に入港した汽船乗客中に一名の患者を発見したので専ら予防警戒に力めたが，螢口満人街で十八人の患者が発生し，大連では海港検疫の際患者四人と保菌者三人を発見した。然るに鴨緑江江岸に繋留せる筏上に患者の続出した形跡があつたので支那側と協力して予防警戒に力めた為，安東領事館管内に六人の患者を出したのみで，満鉄附属地内には患者の発生を見なかつた。

「東支沿線ニ於ケルコレラ病ノ流行並ニ其予防」には，「東支同盟罷業漸く終息の徴を呈するの頃に至りハルビンにおいてはコレラの発生するあり，八月初より同地支那人間に若干の患者ありしか，八月十日頃に至るや逐次猖獗を極め停車場付近にも発生し，又ハルビンを中心として鉄道沿線東西に蔓延するの状況となれり，依て軍においては八月十四日通牒を発し

て之れが予防方法を講し…(以下略)」[26]とある。この記事からは，８月初頭から10日までの間にコレラの感染が拡大し，また，軍でも予防講習がおこなわれるなど，現地のみならず日本にもその状況が伝えられていたことがわかる。この状況は「哈爾賓市会議員ノ選挙ニ関スル件」[27]においても，本来８月10日に実施する予定であった市会議員選挙がコレラのため延期されたことなどからも伺える。さらに同時期，８月14日の「西比利亜経済援助関係雑件／衛生材料供給（陸軍委嘱ノ分)」[28]では，コレラ予防接種に関する記載もあり，また，８月16日には「関東都督府虎列刺防遏費ヲ同府特別会計第二予備金其ノ他ヨリ支出」[29]の文書がある。

また，８月下旬には「蘭領政府ノ大連ヲコレラ流行地ト認定ノ件」[30]，「コレラ予防設備ニ関スル件（チヽハル)」[31]，「威海衛ニ於ケルコレラ病ニ関スル件」[32]，「後貝加爾州ニ於ケル虎列刺予防会議ニ関スル件」[33]などの文書がある。９月に入るとドイツの「砲艦ワチャーグ任務経過報告」に，「９月８日　ハルピンからの朝鮮人コレラに罹患し死亡」という記事が見られる[34]。また，「汕頭以北ノ支那諸港及関東州諸港ヲコレラ流行地ト指定ノ件（解除令ヲ含ム)」[35]として，汕頭から始まったコレラの流行の広まりをまとめた資料もある。

大正９（1920）年に入ると，日本の各地の港でもコレラが発生し，デンマーク司法省・スウェーデン商務院，中国の芝罘海関などが認定している。神戸・長崎，そして台湾でもコレラは流行した[36]。なお，大正９年の学習院修学旅行では台湾を訪問しているらしい[37]が，その実施時期は明確ではない。また，中国・朝鮮でも大正９年にコレラは引き続き発生しており，中国から朝鮮を経て，日本へと入る旅行者に対しての検疫や，中国国内での日本人への検疫などが実施されている[38]。

このような公文書からわかるハルビンのコレラの流行状況は，新聞記事などに見られるように広く日本の市民にも知られるようになっていった。また，大正８（1919）年のコレラの新聞記事は広告も含めて全部で129件である[39]。これに対し，前年大正７（1918）年のコレラ関係の記事はその２割にも満たない22件，翌年大正９（1920）年は，半数に満たない58件であった。また，1919年の上半期に「猖獗」「指定」「続発」の文字が多いこと，２月５日の「安政の虎疫以上各人注意すべし」などの記事から，コレラの蔓延が予見されること，そしてコレラ蔓延が長引きそうであることが伝えられている。さらに，８月11日「満洲虎疫益蔓延」，８月13日の「渡満団体一時差止」の記事があり，その他，８月９日鉄嶺，８月10日満鉄，11日安東・遼陽，12日北京・天津，13日奉天……とその範囲が拡大してゆくことがわかる。

おわりに

大正８年の修学旅行は，ハルビンの鉄道従業員の罷業，吉林奉天軍の騒動，普茶店の虎疫の三つが原因となって引き返してきた可能性が高いことを示した。これは，学習院生たちが，反日運動が高まり，かつコレラが猛威を振るう中，限界まで挑んだことの表れなのではないか。なお，最後に，学習院の修学旅行で詳細のわかるものを，大正８（1919）年の志半ばで引き返してきた修学旅行の予定も併せて一覧にした表を掲げる。

表３　学習院の旅行一覧（＊『輔仁会雑誌』『学習院時報』『西受大日記』を元に作成）

年	期間／行き先／参加者	出典
明治 39 年 （1906）	■期間：7 月 17 日–8 月 13 日 ■行き先〔満洲教員視察旅行〕 大連，旅順，奉天，京城 ■参加者：教員 4 名以上，学生 13 名 （教員）眞崎伊奈兩，原田，大宮，山田 等 （学生）加納久朗，瓜生剛，柳生基夫，酒井晴雄，三島彌彦，板倉勝則，森訥朗，酒井四郎，原亮九郎，岡田忠一，山本八十吉，松平定晴，小泉徳治郎	『輔仁会雑誌』 第 71 号
大正 7 年 （1918）	■期間：7 月 17 日–8 月 14 日 ■行き先 青島，済南，曲阜，泰山，済南，北京，張家口，青龍橋，南口，天津，大連，旅順，奉天，撫順，奉天，平壌，京城，釜山 ■参加者：教員 3 名，医官 1 名，学生 35 名 （教員）鈴木貞太郎，馬場轍，遠藤金英三（医官）稲垣眞 （学生）松方義三郎，東義胤，西酉乙，内田義雄，徳川喜翰，南岩倉具俊，由利公眞，川上久義，岩村英武，松元泰彦，石渡六三郎，小出英經，楢原良一郎，池田清就，三須堯三，木下利昌，三島通隆，由利正通，本多正震，高橋茂雄，徳川宗敬，伊集院虎一，中川久順，加藤泰邦，黒田孝雄，京極譲，徳川喜福，三井高維，片岡鶴四郎，伊達徳眞，後藤良輔，伊達十郎，上原勇二郎，細川立暢，土井利康	『輔仁会雑誌』 第 106 号
大正 8 年 （1919）	■期間：7 月 24 日–8 月 16 日 ■行き先（予定） ウラジヴォストーク，ニコリスク，ハバロフスク，哈爾賓，長春，鉄嶺，奉天，安東，新義州，平壌，開城，京城，釜山 ■参加者：教員 2 名，学生 10 名 （教員）大谷勝眞，安楽直治 （学生）楢原良一郎，田中薫，三井高篤，石渡忠四郎，野崎貞信，高辻正長，岡澤精武，小笠原長隆，一条實基，仙石久博	『西受大日記』
大正 11 年 （1922）	■期間：7 月 21 日–8 月 20 日 ■行き先 青島，済南，曲阜，泰安，北京，大同，石仏寺，天津，大連，旅順，奉天，安東，新義州，京城，釜山	『輔仁会雑誌』 第 118 号，

年	期間／行き先／参加者	出典
	■参加者：教員１名，学生６名 （教員）大谷勝眞 （学生）黎紹基，水谷川忠麿，斎藤房助，加賀謹一郎，松平親義，池田宣政	『学習院時報』第１号
大正 12 年（1923）	■期間：7 月 21 日–8 月 13 日 ■行き先 基隆，台北，淡水，台中，二水，日月潭，埔里，霧社，嘉義，阿里山，台南，泰平，高雄，屏東，北投 ■参加者：教員１名，学生５名 （教員）板澤武雄 （学生）岡村康彦，佐久間貞男，青木五郎，佐野常光，清岡繁榮	『学習院時報』第３号
大正 13 年（1924）	■期間：7 月 18 日–8 月 8 日 ■行き先 小樽，亜港（アレキサンドロフスク），ルイコフ，眞岡，多蘭泊，豊原，川上炭山，小沼，榮濱，大泊，稚内，旭川，帯広，札幌，苫小牧，支笏湖，白老，室蘭 ■参加者：教員１名，学生 13 名 （教員）遠藤金英 （学生）清岡繁榮，福原俊一郎，徳川義寛，肥田達太郎，青木五郎，上野太郎，調所一郎，三田成人，京極高光，内藤政恒，森千秋，郷晃太郎，津輕義孝	『学習院時報』第４号
大正 14 年（1925）	■期間：7 月 21 日–8 月 13 日 ■行き先 大連，旅順，鞍山，奉天，撫順，四平街，洮南，鄭家屯，公主嶺，長春，哈爾賓，安東，平壌，京城，釜山 ■参加者：教員１名，学生６名，卒業生１名 （教員）金田鬼一 （学生）水野勝邦，松平文友，伊臣第一郎，内藤頼博，森千秋，郷晃太郎 （卒業生）細川立暢	『学習院時報』第６号
大正 15 年（1926）	■期間：7 月 19 日–8 月 8 日 ■行き先 基隆，台北，桃園，角板山，台中，二水，日月潭，嘉義，阿里山，台南，高雄，屏東，草山 ■参加者：教員１名，学生３名，卒業生１名 （教員）遠藤金英 （学生）山縣七郎，島村和雄，津輕義孝 （卒業生）細川立暢	『学習院時報』第８号
昭和４年（1929）	■期間：7 月 22 日–8 月 12 日 ■行き先 釜山，京城，元山，長箭，温井里，平壌，奉天，撫順，長春，哈爾賓，大連，旅順 ■参加者：教員１名，学生 14 名 （教員）遠藤金英 （学生）岡部長章，池田政之，西大路隆和，榊原政春，加賀淑郎，伊達宗文，岩倉泰倶，花房福次郎，神谷輝男，垣見貴一郎，大迫明徳，竹内常彦，藤大路親美，曾我準定	『輔仁会雑誌』第 137 号，『学習院時報』第 14 号

注

［1］ 学習院アーカイブス所蔵。

［2］『西受大日記』とは，防衛省防衛研究所が所蔵する旧陸海軍記録であり，シベリア出兵に関する記録が掲載されている。

［3］ JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C07060964000，大正 9 年 5 月其 3「西受大日記」（防衛省防衛研究所）

［4］ 1916 年から 1926 年まで学習院に在職した。1916 年に講師，1920 年に教授となった。この他，学習院では，教務課長，輔仁会副会長などを務めた。

［5］ 1872 年生まれ。1900 年から 1934 年まで学習院に在職した。この時，既に教授であった。

［6］ 楢原良一郎は，古河機械金属の第 9 代目代表取締役会長（昭和 36（1961）年-昭和 46（1971）年在任）。

［7］ 田中薫［1898-1982］は，地理学者で神戸大学の名誉教授であった。

［8］ 三井高篤は，元三井物産取締役社長である。

［9］ 一条実基［1901-1972］は，藤原北家摂関流一条家の分家の出である。明治 35（1902）年に男爵を授爵した。

［10］ 仙石久博は，仙石政敬（従三位勲二等子爵）の子息。

［11］ 潰れて読めない箇所は，■で示した。

［12］〔　〕は不明確な字を示す。

［13］「庶務課日記」大正 8 年 7 月 8 日条。学習院アーカイブス所蔵。

［14］「庶務課日記」大正 8 年 8 月 6 日条。学習院アーカイブス所蔵。

［15］「庶務課日記」大正 8 年 8 月 11 日条。学習院アーカイブス所蔵。

［16］ 表 2 を基にすると，8 月 6 日は 14 日目になるはずであり，一行は長春に到着する予定であった。

［17］『東京朝日新聞』1919 年 8 月 19 日朝刊 5 頁（朝日新聞記事データベースより）。なお，印字が潰れ読めない箇所は，■で示した。

［18］ 国立公文書館デジタルアーカイブ，平 15 財務 00019100，大正 8 年「目賀田家文書第 11 号」

［19］『時事新報』1919 年 8 月 12 日（神戸大学附属図書館デジタルアーカイブ，新聞記事文庫より）

［20］『横浜貿易新報』1919 年 7 月 1 日-3 日（神戸大学附属図書館デジタルアーカイブ，新聞記事文庫より）

［21］『東京朝日新聞』1919 年 6 月 12 日朝刊 3 頁（朝日新聞記事データベースより）。

［22］『東京朝日新聞』1919 年 6 月 12 日朝刊 3 頁（朝日新聞記事データベースより）。

［23］ 飯島渉『ペストと近代中国――衛生の「制度化」と社会変容――』「第七章　一九一九年のコレラ流行」研究出版（山本書店出版部），2000 年，p. 237

［24］ 同上。

［25］ 関東局編『《明治百年史叢書》関東局施政三十年史』原書房，1974 年，pp. 940-941

［26］ JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C06032093100，大正 8 年 6 月 16 日「西受大日記」（防衛省防衛研究所）

［27］ JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B12082525500，大正 8 年 9 月 8 日「清国諸港居留地関係雑件　第二巻」（外務省）

［28］ JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B11090523300，大正 8 年～大正 9 年（1919-1920）「西比利亜経済援助関係雑件／衛生材料供給（陸軍委嘱ノ分）」（外務省）

［29］ JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.A01200169200，大正 8 年 8 月 17 日（1919/08/17）「公文類聚・第四十三編・大正八年・第十九巻・財政四・臨時補給二（特別会計剰余金～臨時事件予

備費支出一)」

［30］ JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B12082408600，大正８年（1919-1919）「各地検疫予防関係雑件　第五巻」（外務省）

［31］ JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B12082409200，大正８年８月20日「各地検疫予防関係雑件　第五巻」（外務省）

［32］ JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B12082409500，大正８年８月27日「各地検疫予防関係雑件　第五巻」（外務省）

［33］ JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B12082409600，大正８年８月30日「各地検疫予防関係雑件　第五巻」（外務省）

［34］ JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C10128437500，大正８年９月８日「大正３年～９年大正戦役　戦時書類　巻186　臨時海軍派遣隊５」（海軍省）

［35］ JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B12082409700，大正８年（1919-1919）「各地検疫予防関係雑件　第五巻」（外務省）

［36］ JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B12082413900，大正９年２月16日「丁抹司法省ニ於テ本邦諸港ヲコレラ流行地ト指定ノ件」「各地検疫予防関係雑件　第六巻」（外務省）

JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B12082414800，大正９年６月20日「瑞典商務院ノ神戸ヲコレラ流行地ト指定ノ件」「各地検疫予防関係雑件　第六巻」（外務省）

JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B12082415700，大正９年７月23日「芝罘海関ニ於テ台湾及長崎ヲコレラ流行地ト認定ノ件」「各地検疫予防関係雑件　第六巻」（外務省）。

［37］ 長谷川怜「満州を旅した学生たち――旧制学習院の満州修学旅行を事例として」『世界の蒐集』（学習院大学東洋文化研究叢書，山川出版社，2014年，p. 324「学習院の海外修学旅行一覧」）には大正９（1920）年に台湾に修学旅行に行ったとあるが，論者は見いだせなかった。

［38］ JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B12082415900，大正９年７月29日「支那ヨリ朝鮮ヲ経テ本邦ニ入ル旅行者ニ対シ下関其ノ他ニ於テコレラ特別検疫施行方ニ関スル件」「各地検疫予防関係雑件　第六巻」（外務省）

JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C03025354700，大正９年９月５日「済南市内支那人に虎列刺発生せしに付検疫開始の件」「大正11年「歐受大日記 自08月至09月」（陸軍省）。

［39］『東京朝日新聞』および『大阪朝日新聞』（朝日新聞記事データベースより）。

（むとう　ながこ　　学習院大学国際研究教育機構 PD 共同研究員）